
ゲーム世界へGO!!

緋剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲーム世界へGO!!

【Nコード】

N5151K

【作者名】

緋剣

【あらすじ】

とあることからゲームの世界に入ってしまった二階堂海斗たちは、その世界を救うために魔王を倒すことになる。しかしそこにはいろいろと複雑な事情がありそうで・・・（基本的に主人公最強です）

1 - 0 (前書き)

久しぶりの投稿です。とりあえず短くてすいません。次からはこれよりは長い話になるので我慢していただけるとありがたいです。

「……???&???

「姫様、いよいよ明日ですね。」

「……そうですね。」

「どうかされたのですか?」

「ええ、もしあの預言が偽物だったらと考えるとね……」

「とにかく、今はうまくいくことを祈りましょう。」

「そうですね。ごめんなさい、心配かけて。」

「いえ、これも私の役目ですから。」

「……???」

明日が例の預言の日だ。ウチは正直なところ預言を信用していない。

それに預言が本当だとしてもそれは……

「……………はあ。」

「隊長おおー！ー！」

「…何だ？」

「明日のことなんですけど……」

「……………はあ。」

「……？？？？」

周りの奴らが今日は騒がしい。

どうも明日の預言とやらのが気になるらしい。

まあ、我にはどうでもいいことだ。

「ふっ、しかし明日はちょうど用事で出かけるからな。ついでに寄
つてやるとしよう。」

… 我の偉大さを見せてやるために

1・0(後書き)

本当に短くてすみません。

1 - 1 (前書き)

本編開始？

「いけっ！　そこだっ！　とりゃああ！　よしっ！！」

俺は一息つくともパソコンの画面から目を離した。

今俺がやっていたのは、最近人気のオンラインRPGである。

パーティが最大で10人、仲間同士でもバトル可能（もちろん金ももらえる）

と言うなんとも裏切りが多そうなシステムではあるがなんとネット人口の8割もの人がやっているそうだ。

その分荒らしプレイヤーも結構いるが…

俺は先月クラスメート兼友人から勧められて

その友人たちとパーティを組んで遊んでいるところだ。

<ゲーム内>

「おい海斗、アレなんだと思う？」

「んー、扉か？」

「だよなあ。」

「行こーぜ、行こーぜ。」

「「ええー」」

「今回だけだから、な？」

「「はあああ」」

今話しかけてきたのが仲間の宮川雄貴と橘雷太だ。
ちなみに俺の名前は二階堂海斗だ。

最初に話しかけてきたのが雄貴だ。
雄貴は基本何でもできる奴でムカつくことに結構イケメンだ。
あと、偶に正義の味方と化すことがある。

そして妙にテンションが高いのが雷太だ。
雷太は学校の成績はそこそこだが何処から仕入れてくるのか裏情報に詳しい。
外見は普通だが雄貴のせいで周りからは普通以下と見られている。
ついでに変態である。

近づいていってみると扉には張り紙がしてあり
《覚悟がある者のみこの扉をくぐるべし》
と書いてあった。

「ふっふっふ、やはりこれは新たな面への入り口だな。」

「「違うだろ!?!」」

「いや、この雷太の目に狂いはない。」

「これ絶対トラップだろ。」

「あーもう五月蠅いぞ、とりゃあああー!!」

「おい待て、押すなあああー!!!」

押し込まれた次の瞬間パソコンの画面が真っ白になった

<現実>

扉に押し込まれた瞬間、パソコンの画面が真っ白に染まり
中央には『Now Reading...』の文字が表示された。

(あいつめ、これで何かおかしくなったら絶対弁償させてやる!)

などと俺が考えている間に画面の文字はいつの間にか

『Gate Open』と変わっていた。

そして更に『Welcome!!』と変わると

画面が急に光り出し、俺はたまらず目を瞑ったのだった。

1 - 1 (後書き)

やることが多く忙しいので投稿のペースが週一ぎりぎりになりそうです。早く時間が空く時期が来ないかなあ？

1 - 2 (前書き)

更新も話の進み具合も遅くてすみません。

「ううう、何なんだいったい……………っ!」

光がある程度収まってきたので目を開けるとそこは一面真っ白な世界だった。

(あははは、これは雷太を本格的にやるか)

などと思っていると後ろから

「あら、ワタシのところに現れるなんて……………」

と声がしたので振り返ってみると、そこには中学生くらいの背丈の少女がいた。黒髪に黒眼なので日本人だろうか？

「ねえあなた、名前を覚えてくれないかしら？」

「(この人なら、ここが何処か知っているだろう。悪い人でもなさそうだし。)俺は二階堂海斗、すみませんがここが何処か分かりますか？」

「ええ、ここはいわゆる異世界よ。」

「異世界って……………何も無いですけど?」

「あゝ、ここは異世界の神界よ。」

神界？　じゃあこの人は神なのだろうか？

「…詳しい説明を頼んでもいいですか？」

「じゃあ長くなるけどあなたがここにいる訳も含めて説明するわね。」

どうやら予想通りこの人は事情を知っているようなので説明をお願いすることにした。

「まずこの世界はあなたたちの世界の思念が集まってできた世界で、あなたがもとの世界でやっていたゲームがもとになっているわ。でもこういう世界は他にもあるし普通ならあなたたちの世界と関わることもなかったの。」

「普通なら？」

「そう、普通ならね。でも問題が起きてしまった。思念の中にあつた異常な部分、これがなぜか急成長してしまったの。本来なら思念が世界へと成長する途中で消されるはずなのに、世界ができあがったあとも残って成長していたの。」

「それで俺たちが呼ばれたということですか？」

「ええ。ワタシたちが”歪み”と呼んでいる異常な部分は今この

世界だけの手に負えるものではなくなってしまうたの。だからこの世界を生み出した世界の人の力を借りることにしたの。」

「でも、どうすればそれは消えるんですか？」

「“歪み”の核となる存在が下界に居るの。それを倒してくれれば消えるはずよ。」

「なんとなくは理解しました。…ところで今更ですがあなたは誰ですか？」

「そう言えば自己紹介がまだだったわね、ワタシはいわゆる創造神よ。でも実はワタシも”歪み”から生まれた存在なの。まあ”歪み”にも少しはいい面もあつたつてことね。」

「え！？ でも”歪み”から生まれたつてことは…」

「そうよ、”歪み”が消えたらワタシも消えるわ。」

自分が消えるにも関わらずこんなことを頼むところが神らしいといえは神らしいな……

「じゃあここからが本題なんだけど、”歪み”を消すことはとても大変なのは分かってくれたわね。そこでワタシたち神の力をあなたたちに与えようと考えているの。」

「神の力を与える？」

「そう、ワタシたちはそれぞれ特別な力を持っているの。その一部を”歪み”を消す助けとしてあなたたちに与えるの。あなた以外の人もこうやって何かの神と会って、力を与えてもらうはずよ。」

「そんなことしていいんですか？」

「仕方ないのよ。ワタシたちは下界に直接影響を与えてはいけな
いんだから…」

「…そうなんですか。（神って意外と不便なんだな）」

「それでお願ひがあるの。」

「何ですか？（神がお願ひを！?）」

「普通の神は加護という形で力を与えるの、でもワタシは”歪み”から生まれた神。さつきも言ったように”歪み”が消えればワタシも消えるわ、でも正直なところやっぱり消えるのは怖いよ。だからワタシと契約をしてほしいの。」

「契約？ どんな契約ですか？」

「簡単に言うとする魂の共有よ。加護よりも強い力を手に入れることができるわ、けれど一度契約したら死ぬまで魂を共有することになるわ。」

「共有すると何が起こるんですか？」

「ワタシは魂となつてあなたの魂と融合する、そして今のワタシの身体は消えてしまうわ。でも魔力を使つて実体化することはできる。他に念話とかもできるわ。でもあなたの意識を乗っ取ることは無いわよ。」

「それをすればあなたは完全には消えずに済むんですか？」

「ええ、魂は残るわ。でも嫌ならしなくてもいいのよ？ 一生のことだからね。」

「…いいですよ、契約しましょう。」

「っ！！ ホント！？ ありがとう、本当にありがとう」

見た目は中学生くらいの少女なので
涙目で感謝されると少し照れくさかったのは内緒である

契約するために必要なものは特に無いらしく
俺たちはすぐに契約することになった。

「契約の儀式つて何をするんですか？」

「名前の交換と誓いを立てることよ。」

どこかの結婚式みたいだな……

「それと、ワタシたちは魂を共有するもの同士なんだから敬語じゃなくていいわよ。」

「分かった。で、名前の交換って言ったが俺たちお互いの名前知らないぞ。」

「うーん、じつはワタシ名前が無いのよ。だからあなたが今つけてくれないかしら?」

まさかの神の名付け親か

せっかくだしもとの世界の神の名前を付けようかな?

「そうだな、アテネなんてどうだ?」

「いいわね。なんか響きが気に入ったわ。」

そう言うてはしゃぐアテネはとてもほほえましかった

「じゃあ次はあなたの番ね。」

「ああ。俺は二階堂海斗、海斗と呼んでくれ。」

「よし、じゃあ儀式を始めるわよ。」

俺とアテネが魔方陣の中に入ると魔方陣が光り始め俺たちの胸の辺りに紋様が浮かび上がった。

「神の名において魂の契約を行う 我が名はアテネ 魂を解き放つ者なり」

「我が名は二階堂海斗 解き放たれし魂を受け入れる者なり」

「我は彼の物と魂を共にすることをここに誓う」

打ち合わせ通りそう言い終えると、この後のことは聞いていない俺が戸惑っている間にアテネはこっちに歩み寄ってきた。

そして俺を見て微笑むとなんとそのまま唇を合わせてきた。

あまりの驚きに動けないでいると、アテネの身体が光り始め俺の胸の紋様に吸い込まれていった。

そして最後にまだ残っていたアテネの方の紋様が蓋のように俺の紋様と重なりと魔方陣が光を失い消えていった。

――その後そこに残っていたのは、キスの衝撃や恥ずかしさなどで固まったままの俺だけだった。

1 - 2 (後書き)

次の次くらいからあとがきで人物紹介を始めます。ステータスも書くつもりなので見てもらえると話が分かりやすくなるかも？

1 - 3 (前書き)

最近全然書けていないので、書かないとストックが……

《そんなに多くの人がこっちに來たのか!?》

あの後茫然自失からなんとか抜け出した俺は、
今はもう魂の一部であるアテネと念話をしていた。

ついでに念話なので口に出さなくてもOKだ。

《そうよ、あの場所に10分設置しておいただけで30人以上も入ってきたわ。》

更によく聞くとどうやら最後に扉をくぐったのは俺たちのようだった。

《そう言えば、カイトたちの世界ではこれってどんなゲームなの?》

《えーっとまず火、水、地、風、空っていう五つの国の中から一つの国を選んでそこに仕えることになる。そしてそこでしばらく働いた後、世界のどこかにいる魔王を倒す旅に出るんだ。》

《じゃあ基本は同じなのね。でもこっちでは一つの国に一人魔王がいてさらにその上に魔神、邪神がいるわ。》

《まるで魔王のバーゲンセールだな。》

《でもこれでカイトたちに頼らなければいけない訳が分かったですよ？》

《たしかにボスの数が七倍はきついな。》

《そういう訳でよろしくね、カイト。》

《じゃあ最後に神力の結晶を渡すわね。》

《神力の結晶？》

《そう、簡単に言うと神の力で造られたアイテムで一人に一つ与えられるの。もちろん全てが武器ってわけじゃないけど、旅の中で役立つものが多いわ。》

《今までゲーム内で使ってたアイテムじゃ駄目なのか？》

《別にそれでも構わないわ。けれどこっちのほうはワタシたちが力を注いだ分強力なのよ。》

《そしてカイトの神力の結晶はこれ！！》

アテネがそう言うのと目の前には一つの指輪が浮かんでいた。宝石の類がついていないシンプルなタイプだが、金属の色は少し朱みがかかっている。

《その指輪の名はヴェリタス、能力はアイテムの創造よ。》

《…それなんていうチート？》

《ちーと？ どういう意味？》

《まあ、反則みたいなものかな。》

《なるほどね。確かにすごい能力だけど、カイトが使いこなせないようなものは創れないわよ。》

《自分のレベル以上のものは創れないってことか……》

《あとそれはヒビロカネで造ってあるから壊れる心配は無いわよ。》

《ヒビロカネって…… またすごいものでできてるんだな》

《さて、カイト？ それをどの指にはめる？》

《…えっ！？》

《実はその指輪ははめる指によって能力の強さが変わるの。ちなみに一番良いのは左手の薬指よ……っ／＼／》

そこでアテネはさっきのキスを思い出したのか、顔を真っ赤にして俯いてしまう。

それを見て思い出してしまった俺もきつと顔が赤くなっているだろう。

もとの世界では恋愛に縁が無かったので

こづいづことにはほとんど耐性が無いのだ。
ちなみにさっきの俺にとってもアテネにとっても
生まれて初めてのキスだったりする。

《／／／……次に効果が高い指は？》

《っ……右手の薬指よ。》

《じゃあとりあえず、そこにはめることにするよ。》

《………そう。》

アテネが若干残念そうなのが気になったが結局俺は右手の薬指にはめることにした。

――数分後

《そろそろ時間ね、下の世界に降りるわよ。他の人たちもそろそろ
集まってるんじゃないかしら。》

《どうやって降りるんだ？》

《大丈夫。それはワタシがやるわ、いくわよ『アドベント……！』》

アテネが呪文らしきものを唱えると、
また最初のように光が広がっていった。

1 - 3 (後書き)

次から登場人物紹介を後書きで書きます。とりあえず海斗、雄貴、
雷太の予定

1 - 4 (前書き)

後書きに書く登場人物紹介はステータスのみです、外見や性格はそのうち番外編的に書きます。

「ううう、今度はどうなったんだ？」

光がある程度収まってきたので目を開けると

今度は石造りの部屋の中だった。

しかも結構昔に建てられたらしく、所々ひびがはいつている。

「~~~~!! ~~~~~? ~~~~~!!?」

部屋を観察していると扉の向こうから人の声らしきものが聞こえてきた。

しかも一人だけではないようで、話し声が複数聞こえる。

（そういえばアテネがこっちに来た人は30人以上いるって言うってたな、とすると一応は仲間ってことだな。とりあえず行ってみるか。

）

雄貴たちもそこにいるだろうと考えた俺は声のする方へ向かって行くことにした。

扉をくぐるとそこはサロンのようになっていて人が20人ほどいるようだった。

高校生や大学生のような人が多かったが、中にはもつと年上の人もいた。

男女比は7:3ぐらいだ。しかし驚いたのはその人たちの髪や目の色が

ばらばらかつ普通ではなかったということだ。

(何だこの人たちの髪や目の色は!? 俺のは……変わってないな)

《カイトー!! 聞こえるー??》

不意にアテネが念話で呼びかけてきた。念話で呼ばれるのは初めて、

胸の辺りが温かくなるような感覚だった。

《アテネ? どうしたんだ?》

《言っでなかったけど、カイト以外の人は神に力を与えられている立場だから多少外見が変わるのよ。》

《そうなのか。教えてくれてありがとうな。》

《いいのよ、そんなこと。それより次からも用があるときはこうやって呼びかけるから、カイトも用があつたら今みたいに念話で呼んでね。》

《分かった。ん? 誰かがこっちに来るみたいだからまたあとでな、アテネ。》

《じゃあねー》

なんだかアテネが最近とてもフランクに感じる俺だった。

「お、やっぱり海斗だったか。」

「…その声は雄貴、だよな？」

雄貴も顔や声は変わらないが髪と目の色が金色に変わっていた。

「そうだけ、ついでに雷太も向こうにいるからそのうち来ると思う。」

「…にしても変わったなあ。」

「いやいや、お前は変わらなさ過ぎなんだって。」

実際には全く変わってないけど、わざわざ言うこともないだろう。

「でも周りの話を聞いてると、変わったのは髪と目の色だけらしいぜ。例外もあつたけど髪の長さが変わった程度だったし。」

「そうか。で、ついでに聞くが今のところ何にコ」やっほ〜〜い、海斗。「……………」

紫色の髪と目をした雷太が現れた。海斗はそれを見ると無言で雷太に近づいていった。

「おいおいどうしてグハツ!」

ボコッ! バキッ!! ゲシッ! ……………

「ふう、迷惑料はちゃんと返したぜ。」

「ところで雄貴、その背中の剣はどうしたんだ？」

雄貴が背中に背負っている、純白の大剣を指さす。

確かに雄貴はゲーム内で剣を使っていたがあんなに大きくなかったはずだ。

…え、雷太？ その辺に転がしてあるけど何か？

いつものことだから何も問題ないし、現に雄貴も気にしてないぞ。

「ああ、お前も説明受けたから分かると思うけどこれがオレの^{ホテ}神力の結晶だ。」

「なるほど、納得した。」

「能力も教えたいところだが………秘密だ。」

「もったいぶるところは相変わらずだな。」

「そう言うなよ。ん？ おい海斗、向こう騒がしくないか？」

「え？ ああ、ちょっといざこざが起きてるみたいだな。」

アテネと融合して五感が鋭くなっているからか、内容まできっちり聞こえてきた。

「どうやらガラの悪いやつが、しつこくナンパしてるみたいだぞ。」

「何だと！？ 行くぞ海斗！！」

あゝあ、雄貴の正義のヒーロースイッチが入っちゃったよ。まあ仕方ない付き合おうとするか。

近づいていくと大学生くらいの男が俺たちと同年代の女の子に絡んでいるようだ。た。

周りの人は下手に手を出したくないからか少し距離を置いて、見て見ぬふりをしているようだ。た。

「いいじゃん、一緒においでよ。」

「いえ、友達がいますからいいです。」

「そんなこと言わずに仲良くしようぜ。」

「ーっ、だからいいですってば。」

「チツ、いいから来い!!」

「きゃ、放してくださいっ!!」

「うるせえな、こっちにK」おい、やめろよ。「ああ? 何だと?」

「だからやめろって言ってんだよ。」

「やめさせられるもんならやってみろよ。」

そう言うと男は女の子から手を離してこちらを向くと構えをとった。どうやら多少は武術の経験があるらしく構えはそこそこきれいだった。

「ほら、素手でやってやるから来いよ。」

「言われなくてもやってやるさ。」

雄貴はそう言い捨て相手に向かって突っ込んでいった。この世界ではゲーム内の強さが反映されるのでゲーム内でレベル58の雄貴は相当強いはずだ。レベル58と聞くとそこまで強くないと思うかもしれないが、ラスボスを倒すのはレベルが50あれば十分と言われていることから考えれば分かってもらえると思う。

しかも雄貴の家は道場なので、そんじょそこの武道家などには技術で負けることもないはずだ。

……あの男終わったな

「うらああああー!!」

男は雄貴が突っ込んできたタイミングに合わせて顔面にパンチを繰り出す。雄貴は身体を沈めてそれを回避する。そしてそのまま男の腹に体当たりすると男が体勢を立て直す前に、そのまま背負い投げをした。男は受け身を取る暇さえなく投げられ頭を打ったのか、頭を抱えて床で悶絶している。

俺は男のことはとりあえず雄貴にまかせて絡まれていた女の子に声をかけた。

腰ぐらいまでの長さの茶色の髪と髪の色と同じ茶色の目をしている。どうやら全員髪と目の色は統一されているらしい。

「え〜つと、大丈夫か？」

「あ、はい、ありがとうございます、助けていただいて。」

「いや、お礼ならもう一人の彼に言ってあげて。やったのは全てアイツだから。」

「でも「クソがあああ、死ねえっ!!!」え？」

見るとナンパ男が立ち上がりナイフを女の子へ投げつけたところだった。どうやら雄貴に敵わないとみて攻撃の対象を変えたらしい。多分もう最後のあがきだろう。それにしてもここでこの女の子を攻撃するとは、予想以上のひどい奴だな。

「チッ！」

俺は呆然としていて動けない女の子を庇うように前に立つと、ナイフの刃を右手の人差し指と中指ではさみ受け止めた。

反射神経や動体視力も向上しているらしく余裕で受け止めることができた。

「セッ!!!」

雄貴も今度は手刀で男の首を攻撃し、気絶させた。

「おつかれさん。」

「あの程度の奴じゃそうでもないさ。」

「何で最初から勝負を決めなかったんだ？」

「いや、同じ武術をやるものとして改心してくれるかと思ったんだが考えが甘かったらしい。」

「誰も怪我してないんだし、次から気をつければいいさ。」

その時助けた女の子が何か言いたそうに近づいてきたので

「さて雄貴、後はまかせた。」

と言ってこの場を去ることにした。騒ぎを聞いて集まりはじめている野次馬から逃げるためだ。あのまま騒ぎの中心にいたらいい見世物だろう。とりあえず雷太を起こしに行くか。後ろから呼ばれた気がするが気にしない気にしない。

1 - 4 (後書き)

登場人物紹介です(ステータスのみ)

二階堂 海斗

L V . 3 5

職業：傭兵

HP (体力)	3000
MP (魔力)	1800
AT (攻撃力)	552
DE (防御力)	543
MA (魔法攻撃力)	715
MD (魔法防御力)	611
SP (素早さ)	657

HP
1000

橋 雷太
LV: 49
職業: 魔術師

SP	MP	AT	DE	MA	MD	HP
304	560	354	274	254	261	1200

宮川 雄貴
LV: 58
職業: 聖騎士

S P	M D	M A	D E	A T	M P
2 3 4	2 7 2	3 0 2	2 5 3	1 6 7	6 8 0

海斗がレベル35なのにステータスが以上に高いのは、アテネと融合したからです。実はレベル100以上のステータス値です。その辺の事情はおいおい書いていきます。

「くっそ〜、雄貴の奴また一人だけいい目にあいやがって。」

一人野次馬から逃げ出して雷太のところに行くときまだ寝ていたのが俺がナイフ（ナンパ男が投げつけてきた）で突つくと「むぎゃあぁ」という変な悲鳴と共に飛び起きた。最初こそ俺に文句を垂れていたが俺が雄貴の現状を話すと文句の対象が俺から雄貴へと変わった。っていった。

雷太も当然雄貴のところに行こうとしたが、野次馬が多かったので仕方なく諦めたのだった。

ついでに雷太がまたと言ったのには理由がある。雄貴はかなりのイケメンである、そして正義の味方のように困った人は助けるのがポリシーなのだ。その上文武両道で何でもできる奴なので、当然のごとくとてもモテるのだ。本人も多少は分かっているらしいが……だから今回のように絡まれた女の子を助けると、大抵その女の子は雄貴に惚れるのだ。まあ俺にとってはいつものことだし、どうでもいいのだが。

しばらくすると野次馬が居なくなつたので、雷太が雄貴のほうへ走っていった。俺が雷太の後ろからのんびり歩いていると前のほうから

「ああああああ〜」

と雷太の声がした。いい加減静かにしてほしいものだ。見ると雄貴

はまださっきの女の子と一緒にいたようで雷太はそれに反応したらしい。

「うるさいぞ、雷太。こいつがモテるのはいつものことだろ？」

「そうじゃない、この女の子はあの南高の歌姫だぞ。お前それを早く言えよ〜！」

「歌姫？ 何だそれ？」

「知らないのか！？ 雄貴はどうだ？」

「少しだけなら聞いたことがあるぞ、歌で喧嘩をとめたとか。」

「そうそうその人だよ。」

（相変わらず裏情報に詳しい奴だな）

雷太が長つたらしい説明を始めようとしていたのでナイフ（再登場）を足元に投げつける。思ったよりもうまくいきナイフは雷太の足の間の地面に刺さった。いきなりのナイフ投げに驚いたのか雷太は驚いて固まっている。あと3分は大丈夫だろう。

「っていうか海斗、あそこで逃げるなよな。」

「だって俺目立つのとか嫌いだし。」

「あ、あの……」

女の子が遠慮がちに話しかけてきた。確かに今の俺たちの会話は慣れない人にとっては入りづらいものだろう。ちよつと反省…

「ん？ あ、ごめんね。どうかした？ もしかして雄貴と二人つきりになりたかったとか？」

「いえ、そうではなくて改めてさっきのお礼をしたくて。」

驚いたことにこの子は雄貴に惚れてはいないらしい。そういう人を見るのはまだ6人目だ、約100人中で。まあ、今後どうなるかは分からないけどな。

「だからいって、俺は何もしてないし。」

「しました。ナイフから私を庇ってくれたじゃないですか。」

「あれはこっちに飛んできたから止めただけで…」

「じゃあ、私の前に動いてきたのは偶然ですか？」

「……………」

どつちやらだったようだ。

「ふふっ、やっぱりそうじゃないですか。優しいんですね。」

「はあ（何か違う気がするけど…）」

「本当にありがとうございます。私は神崎美羽っっています、あなたの名前も教えてもらっていいですか？」

「俺は二階堂海斗、よろしく。」

「海斗さんですね、こちらこそよろしくお願いします。本当ならもっと話していたいんですが、友人を待たせているので失礼します。ではいつか必ずお返しをしますね、また会いましょう。」

そういつてこちらに微笑むと走って去っていった。

その後復活した雷太が奇声を上げながら走って追いかけていこうとしたが俺と雄貴が殴って気絶させた。

そしてそのまま置いておくと邪魔になるので壁際に雷太を寄せておく。改めて周りを見まわすと知り合いのいる人が多いらしく小さいグループがあちらこちらでできていた。多いところでは10人ぐらいのグループもあった。

そんな感じで時間をつぶしていると突然ホールに声が響いた。

「異世界の皆さん、ようこそお越しくださいました。」

1・5(後書き)

しばらくの間不定期更新になると思います、すいません。

1 - 6 (前書き)

遅くなつた上に短くてすいません

「異世界の皆さん、ようこそお越しくださいました。」

突然の声に周りの人たちも喋るのをやめて声のしたほうを向く。そこには女の人たちが立っていた。

赤い髪に赤い目のドレスの子、黒い髪に赤い目のメイド服の子、緑の髪に青い目の着物みたいな服の人の3人だ。メイド服の子はドレスの子を守るようにすぐそばに立っているので貴族とのお付きのメイドというところだろう、残りの一人も見たとこ知り合いのようだ。

「始めまして、私は火の国第1王女のシフォンと申します。そしてこちらは私のメイドでサラです、よろしく願います。」

「ウチは水の国魔法剣士隊隊長のダイナや、よろしゅうな。」

「どうやらこの人たちはこの世界の住人らしい。」

「さて早速で悪いんやけど、みんなには5つのグループに分かれてほしいんや。」

「皆さんもすでに聞いていると思いますがこの世界は5つの国に分かれていて、1つの国に1人の魔王がいます。そのため戦力を分散して各国の魔王を倒すという作戦を行うことになりました。」

メイドのサラさんがそう説明すると、戦力は集中するべきだという意見が出てきたが

すでにどの国も一刻を争うような事態のためこれしか方法がないという言葉にあきらめざるをえないようだった。そんなこんなでグループを作り始めていると後ろの扉が開かれた。

「待て、グループは4つにしる。我が国にはそいつらは要らん。」

生意気な発言にみんなが振り向くと、金の髪に金の目の鎧姿の男が白馬に乗って現れた。

そして俺たちの前まで馬で歩み寄ってきた。

「我の名前はカイゼル、空の国の第1王子にして騎士隊長だ。そして用件は今言った通りだ。」

突然の発言にシフォンが驚き前が出る

「お待ちください、この作戦はもう決定事項のはずです。あなたの勝手な判断で決められては困ります。」

「作戦？ 生憎だが空の国はその作戦から外れることにした、他の国はどうか知らんが我らは自分たちだけで魔王を倒す。」

「そんな…… 分かりました、今さら言ってもどうにもできないようです。そのかわり分かっているとは思いますが、負けることはゆるされませんよ。」

「当たり前だ、我ら空の国の力を見せてやる！！」

そう言うと馬首を返すと入ってきた扉から出て行ってしまった。無

駄に自信があるようだったが

あんな奴に限ってあっさり負けたりするんだよな…

「見苦しい姿をお見せしてしまい申し訳ありませんでした。今お聞きになった通り当初とは異なりますが、皆さんには4つのグループに分かれてもらうこととなります。できるだけ人数が片寄らないようにしてもらえるとありがたいです。」

「海斗、雄貴、一緒に組もうぜ」

これまたいつの間にか復活していた雷太が提案してきた。確かに知っている人と組んだほうが行動を共にするのは安全だろう、これです。まず3人。30人は居るはずだから1グループ8人くらいの人数になるはずだ、あと5人どうするかな……

1 - 6 (後書き)

大雑把ですがこの世界の地図を描いてみました <http://105.mit.edu/net/userpage/image/viewimage/icode/i6908/>

1・7 (前書き)

更新が遅くなっていく……

3人で組んだところで周りを見渡すと1組だけはすでにグループが完成していたが、ほとんどの人はまだ誰と組もうかと考えているようだった。

すでに完成しているグループは全員知り合いのようなので、元からパーティを組んでいたのだろう。

「あの〜 ちょっといいですか？」

声のした方を向くとそっくりな顔をした俺たちより年下らしき男子と女の子が立っていた。

髪の色は男の子は金色、女の子は銀色と違うがどちらも碧眼で人形のような

整った顔立ちをしている。話しかけてきたのは女の子のほうらしい。男の子のほうは不機嫌そうな表情で女の子の後ろに立っている。

「さっきいざこざを治めたのってあなたたちですよね？」

「いざこざ？ …… ああ、さっきのナンパ男か。あれは俺たちというよりこいつだな。」

そう言って雄貴を指さすと、女の子は雄貴の方を見てなるほどというように頷いた。

「そうなんですか。それで、お願いがあるんですけどわたしたちとグループを組んでくれませんか？」

「俺はいいけど、雄貴はどうだ？」

「いいんじゃないか？ 他に組む予定があるわけじゃないし。」

「なぜ雷太に聞かないかって？ だって美人を仲間にするとか何とか言っただけで走っていったきり帰ってこないんだから仕方ないだろ。」

「ん〜、じゃあ決定だな。俺は二階堂海斗、よろしく。」

「宮川雄貴だ、よろしく頼む。あと、一応もう一人仲間がいるからまた後で紹介するよ。」

「わたしは天川月ルナといいます、よろしくお願いします。そしてこっちは双子の兄の太陽です。」

双子と聞いて俺と雄貴は顔を見合わせると、やっぱりというように頷いた。誰もが兄弟だと思っくらいに2人は顔がそっくりなのだ。髪型と服装を同じにしたら見分けがつかないかもしれないな。

「……………」

男の子のほうは相変わらず不機嫌そうな表情でこっちを睨んでいた。

「お兄ちゃん、ちゃんと挨拶して。」

「最初に言っておくよ。妹は頼りにしてるみたいだけど、僕はあなたたちを信用しないからね。」

「お兄ちゃん、なんてこと言うのよ!」

「いいんだよ。言つとくけど妹を守るくらい僕1人で十分だから、余計なちよつかいはかけないですよ。」

そして言いたいことを言い終えたのか、散歩をしにいくと言って去っていった。

「ごめんなさい、こつちからお願ひしたのにあんな態度で。実は……事情を聞いたところ、天川家は結構なお金持ちで小さい頃から周りには敵愾心や下心を持った人が多くいたらしい。そしてそれらの人々から自分自身を守るために他人を信じることをあまりしなくなつたらしい。しかし妹の月に対してはは逆に過保護気味だという。……シスコン?」

話し終えると月は太陽を連れ戻してくると言って探しに行った。

これで5人か、雷太はまだ帰ってきてないけどちゃんと見つけられるのか心配だな。あの性格だし……

――5分後

「おい、仲間2人見つけてきたぞ。」

「「マジで!?!」」

つい雄貴と声がかぶってしまふ。つまり雄貴も俺と同じように雷太の性格では仲間が集まらないと思っただらう、今までの経験上仕方ないけど。雄貴とヒソヒソ声で相談する。

「雷太に着いてくるなんて、ちょっと変な奴とか浮いている奴なんじゃないか？」

「いや、警戒心がほとんど無い奴っていう線が残っている。それに賭けよう。」

「何話してるんだよ？ せっかく連れてきてやったのに。」

俺たちは雷太が連れてきた人たちを見てホッと安心した。

なぜならそこにいた2人の女の子の片方の子は、さっき俺たちがナインパ男から

助けた女の子だったからだ。意外に再会は早かったな。もう1人の女の子は

強気そうな女の子で、俺たちのほうをじっと見渡していたが雄貴を見つけると目をとめた。

「なぐんだ、美羽を助けたのってアンタだったの。」

「ん？ 知り合いか、雄貴。」

「ああ、あいつは如月 凜。達人レベルの武道家で、大会とかには出ないけれど有名な奴なんだ。」

「すごい知り合いだな、でもこの世界では心強いかな…」

「くっそ〜雄貴の奴、戦姫とも知り合いなのか。」

「「戦姫？」」

「海斗はともかく今度は雄貴も知らないのか？ 南校で歌姫と並ぶアイドル的存在で、雄貴の言ったように強いから戦姫って呼ばれているらしいぞ。」

「アンタよくそんなこと知ってるね。」

「フッフッフ、俺にかかれはこの程度……」

雷太の異様な様子に2人とも引いているが、本人は自分の世界に入っ
っ

気付いていないようだ。………いつものことだが
これで7人になったのでグループ完成ということでもいいんだろうか？

その後、天川兄妹が連れてきた三井 敏明という堅そうな名前だが
実際は結構軽い大学生が仲間に入り、俺たちを含め4グループが完
成した。

1 - 7 (後書き)

次回は登場人物紹介です。(ステータスではなく外見や性格など)

EX 1

二階堂 海斗 (にかいどう かいと)

身長168cm、黒髪に黒い眼。

クールな感じの顔つきで雄貴ほどではないがイケメンである。

暁学園高校の2年生で雄貴、雷太とは中学からずっと同じクラスである。

目立つことが好きではないので本気を出すことはあまりないが、本気を出せば

雄貴にも負けないほどのスペックの持ち主。

宮川 雄貴 (みやがわ ゆうき)

身長176cm、金髪に銀色の眼。

どこかのアイドルグループにいたようなイケメンで、雄貴と知り合った女の子の

9割以上は雄貴に惚れているらしい。家が道場で空手、剣道、柔道をマスターしている。

それに加えて正義感が強いので、不良グループをつぶしたことも何回がある。

1年の学年末試験では学年5位をとるなど勉強もできる。秀才。

橘 雷太 (たちばな らいた)

身長166cm、紫の髪に紫の眼。

知力、体力、容姿のどれも平凡だが、他の学校の情報などにはやけに詳しい。

美人が大好きで異様な反応をしては引かれているが本人は気付いていない。

常にテンションが高いが、何かショックなことがあると固まってしまう。

神埼 美羽（かんざき みう）

身長160cm、茶髪に茶色の眼。髪は腰までのストレート。優しいような顔立ちの美少女で、周りからは天使みたいだとよく言われている。

南高校（暁学園の近くにある）の2年生で、凜とは幼馴染で同じクラス。

不良の喧嘩を歌を歌って止めたことから歌姫と呼ばれている。誰にでも優しくほんわかした性格らしい。

如月 凜（きさらぎ りん）

身長167cm、空色の髪に空色の眼。髪はポニーテールにしている。

気が強そうな凛々しい顔立ちの美少女。

ほんわかしている美羽を守るようにいろいろな道場を渡り歩いていたため

すでに達人レベルである。剣術を得意としている。

不良の喧嘩を実力行使で止めたことから戦姫と呼ばれている。

はつきりした性格だが、恋愛ことは苦手らしい。

天川 太陽（あまかわ たいよう）

身長161cm、金髪碧眼。

白麗大学中等部（隣町にある）の3年生で、月とは双子の兄妹。

実はまだ本編で名前が出ていない。家が金持ちで下心を持って近づいてくる人が

多かつたため警戒心が強い。しかし妹の月にはとても甘いらしい。少し自信過剰なところがある。

天川 月（あまかわ るな）

身長156cm、銀髪碧眼。髪は肩より少し長く、軽くウェーブがかかっている。

人形のような可愛らしい顔立ちの美少女。

内気な性格で、気に入った人にしか懐かない。そのせいからか

小動物のようなオーラが出ている。太陽とは逆に自分にあまり自信がない。

三井 敏明（みつい としあき）

身長178cm、白髪に緑の髪。

白麗大学の3年生、しかし校舎は違うため天川兄妹のことは知らない。

堅そうな名前の割に軽い性格だが、暴力を振るうような荒いことはない。

アテネ

身長155cm、黒髪に黒い眼。髪は膝くらいまでのストレート。

（実体化した時）

見た目は中学生くらいのも美少女、しかし本当は神なのでどこか神々しさがある。

”歪み”から生まれた神だが、もともと存在していた神よりも力の上である。

海斗との契約で”歪み”と離れ、自由の身になったので海斗にはとても感謝しているらしい。

そのあたりの詳しいことは本編にて……

EX1（後書き）

次回からは第2章、火の国編に入ります。登場人物紹介（ステータス編）は後書きに不定期掲載の予定です。

2 - 1 (前書き)

前回の更新から2カ月もたっ
てしまいごめんなさい。まだ不定期更
新が続きます。

俺たちは今火の国に向かう馬車に乗っている。

あの後くじ引きをした結果俺たちのグループは火の国担当となったので、

王女のシフォンとそのメイドのサラが乗ってきた馬車で一緒に火の国の王城へ移動中なのだ。

10人も乗れる馬車なんてありえないって？

どうやらこの馬車は王族専用の馬車らしく、あと5人は乗れるほど大きいものだ。

今はみんなそれぞれ雑談をしているところだ。雄貴とシフォン、雷太と敏明、女の子たち3人と

いうように分かれている。ちなみにサラは御者をしていて、太陽は窓の外を眺めている。

俺は特にやることがないので昼寝をすることにした……

「カイト、起きて起きて。」

「ん〜」

いつの間にかぐっすりと寝てしまっていたらしい。目を開けるとそこは真っ白な空間だった。

なんか見覚えがあるような気がするんだけど……

「おはよう、カイト」

「ん、アテネ？ ってことはここはやっぱり……」

「そう、最初に会ったところよ。カイトと契約したから厳密に言う
と少し違っただけど、どっちもワタシの創った空間なの。」

「なるほど、他の人はいないみたいだけど俺だけ連れてきたのか？」

「そうよ。でも寝ていたカイトの意識だけを連れてきたから向こう
の人たちは気付いてないはずよ。」

「……いろいろと便利だな」

「すごいでしょ？」

そう言っアテネはテストで満点をとったのを自慢するような
得意げな感じでこっちを見てきた。神様でも子供っぽいところがあ
るんだな。

「それで何でここに呼んだんだ？」

「え〜っと、いろいろと補足説明しようと思ったのよ。」

「補足説明？」

「そう。歪みとこの世界についてももう少し詳しく説明しておけば、
何か役立つかなって思って。」

「そうか、ありがとな。」

「いいのよ、この世界にカイトたちを呼んだのはワタシたちなんだから。」

「じゃあ、まずこの世界は俺たちがやってたゲームとほぼ同じ設定でいいんだよな？」

「そうね。前に話した通りこの世界はそのゲームというのが元になっているから、”歪み”の影響を受けていない部分は同じはずよ。」

「なるほど。あと1つ気がかりなのがこの世界で死んでしまった場合なんだけど、どうなるか分かるか？」

「この世界から消えて元の世界に戻るはずよ。多少影響は出るでしょうけどね。」

「死ぬことはないのか？」

「それはないわね。まあこの世界であったことの記憶が消えたり、少し体調を崩したりする程度のはずよ。でも死んでも大丈夫という精神でいるのは危険だからやめてね、安全だと分かっているだけでも心配だからから。」

「わかったよ、ありがとう。」

「本当にそこは気をつけてね？ それでまだ質問はあるかしら？」

「ん〜あとはないかな。」

「それじゃあ、ワタシから2ついいかしら？」

「まずこの世界に来た人たちが何らかの神から力をもらったのは知ってるわね？」

「ああ、最初の時に説明してもらったからな。」

「でもワタシたちは契約をしたから、その力をはるかに超えた力があるの。でもそれはあまり目立たせないほうがいいわ。」

「目立つと”歪み”から目をつけられるってことか？」

「そうよ。だから今のうちに他の人と同じような力の使い方を覚えてもらおうと思って。」

「なるほどな、どんな感じでやるんだ？」

「まずは他の人と同じような武器を創ることから始めましょう、さすがにあの指輪だけじゃ疑問に思われそうだし。」

〈略〉

話し合った結果、俺の武器は白銀の銃ということになった。ちなみに銃のモデルはデザートイーグルである。能力は魔力を弾として打ち出す能力ということにした。

「これではれないはずよ。でも、一応気をつけてね。」

「わかってる、それであと1つは何なんだ？」

「それはカイトの修行についてよ。今の力でもカイトは十分強いけれど、”歪み”本体の強さはそれでも倒せるかそうか分からないほど強い。そこでカイトにはより強くなってもらっわ。」

「修行っていうと筋トレとかそういうのか？」

「そういう基礎的なものはやらなくていいわ。修行の内容はシンク口率を操作することよ。」

「シンク口率？」

また知らない単語が出てきたな。

「シンク口率っていうのはね、魂同士の融合度のことよ。もちろん今でも魂は融合しているけれどそれは最低限のレベルに抑えられている。その融合度を一時的に操作することが修行内容よ。」

「一時的にか・・・ちなみに今は何パーセントなんだ？」

「今はだいたい1パーセントってところね。」

「たった1パーセントか。つまり残りの99パーセント分の力がまだ引き出せるってことだな。」

「そういうこと。だからしばらくはこっちではシンク口率の操作、あっちでは射撃訓練をしてもらうことになるわね。」

「わかった、もう修行を始めるのか？」

「いえ、まだ時間はあるから大丈夫よ。それとそろそろあっち側で呼ばれるころよ。」

「何かあったのか？」

「何かあったわけではないんだけど、みんな話したいことがあるみたい。」

「わかった。また用があったら呼んでくれ。」

「ええ、じゃああっちに戻すわね。」

そう言ってアテネがこっちに手を向けると俺の体が光りだし目の前が真っ白になった。

2 - 1 (後書き)

ほとんど会話でしません。たぶん次回も会話中心になります。ちなみに細かい描写をしていないのでわからないと思いますが、この作品内で1番美人なのはアテネです。

2 - 2 (前書き)

ただ今不定期更新中

「海斗、起きろ。」

声が聞こえる、どうやら誰かが俺を起こそうと呼んでいるようだ。まあ、アテネが話し合いをするみたいなのを言ってたからそのため起こされるのだろう。

「ん？ どうした、もう城に着いたのか？」

「いや、まだだけど少し話し合いたいことがあるんだ。」

「何について話し合うんだ？」

「自分のもらった神力ポテンティアの結晶について話し合おうと思う。これからいつでも戦いになるか分からないから、少しでも戦いやすいようにしたいんだ。」

「なるほどな。」

確かにこれから戦っていく中で味方の能力が分かっているれば、戦いがより有利に進められるだろう。しかし…

「味方とはいえ、手の内をさらすことにもなるがいいのか？」

「その点についてはすでにみんな納得済みだ。」

「そうか、ならいい。」

「じゃあまずはオレからな。」

雄貴はそう言っつて背負っていた1.5メートルほどもある純白の大剣を降ろし、俺たちに見えるように置いた。

「これがオレの神力の結晶の大剣だ。名前はボニタスで能力は魔力の分散、つまりこの剣は魔法攻撃も斬ることができる。それにこの剣はオリハルコン製だから傷つく心配もない。」

オリハルコンと言ったところで何人が驚いているな。確かにこのゲームでは

オリハルコンは存在しているがともレアなもので見つけた人が3人しかいないらしい。

反応しなかった人はそのことを知らないんだろう。ちなみに俺の持っている指輪は

ヒビロカネでできているが、これはアテネが創った金属なのでゲーム内にはもともと存在していないものだ。

「それじゃああとの人はこの席の順番で言っつていくことにしよう。」

説明し終わった雄貴が周りを見て言った。

つまり順番は雄貴 雷太 俺（海斗） 凜 美羽 月 太陽 敏明
ということだ。

「じゃあ次は自分の番だな。自分の神力の結晶は白い本で名前はアルカナ、能力は天候を操ることだ。」

雷太が手に持っているB5のノートと同じくらいのサイズの
真っ白な本を見せて、ぱらぱらとめくっていた。

細かい字で何か書いてあったがそれを読めるのは能力をもらった
雷太だけらしい。

次は俺の番だな、アテネとの打ち合わせ通りにやれば問題ないだろ
う。

「俺の神力ポテンティアの結晶、ヴェリタスは白銀の銃で能力は魔力を弾として
撃つことだ。ちなみに魔力の込めかたによって威力などを変えられ
るみたいだ。」

みたいだと言ったのはまだ試したことがないからで、アテネが言う
には
着弾地点を凍らせたり貫通弾のようにしたりもできるらしい。

その後も説明は続いていき全員が説明し終わったのは
城が見えてくるころだった。

ちなみに他の人の神力ポテンティアの結晶はこんな感じだった

凜：ミスリル銀製の30センチくらいの小刀で名前はパトロン、退
魔能力がある

美羽：ユグドラシルの枝で作られた50センチくらいの杖で名前は
ヴィルトス、能力は超治癒能力

月：月長石のペンダントで名前はパクス、能力は獣化と自分を水に変えること

太陽：タングステン製の1メートルくらいの剣で名前はグロリア、剣に炎を纏わせることができる

敏明：スカウターみたいなもので名前はオクルス、相手の力や弱点を見ることができる

ちなみに月の能力が2つあるのはこの世界には月が2つあるかららしい。

「みなさん、城に着く前に言っておきたいことがあります。私は異世界の人に助けてもらうという考えに賛成していますが、中にはそれに反対している人もいます。そのため城で腕試しのようなことが行われるかもしれませんが、あらかじめそのことは理解してください。」

城にもうすぐ着くという時にシフォンがそう切り出した。

やはり見ず知らずの人に自分たちの世界を任せるのは不安だという人がいるのだろう。

俺以外の人もある程度予測していたのか特に反論する人はいなかったが、凜や太陽なんかは少し不満そうだ。

「いいさ、オレたちもその腕試しで自分たちの力を確かめることにする。」

雄貴がそう言っているとシフォンは若干顔を赤くしながらお礼を言った。
さしずめ俺が寝ている間に何かあったのだろう、この世界に来てから
初めて惚れさせた相手が王女か…
この世界でも雄貴争奪戦がそのうち起きそうな予感がする俺だった。

2・2（後書き）

今さらながら服装を書いてないことに気付きました。そのうち後書きで書く予定だったステータスと一緒に書くつもりです、順番がばらばらですいません。

2・3(前書き)

今回はいつも以上に短いです。

城に入った俺たちはまず王座の間へと連れてこられた。その部屋ではすでに王や兵士らしき人たちが大勢居て俺たちの到着を待っていたようだ。好意的な視線が多いが中には明らかにこつちを睨んできている人もいる。

「よく来たな、お主たちがこの国を分担する者たちか？」

「はい、そうです。」

俺たちの一番前にいる雄貴が答える。いつの間にか（多分寝ている間）雄貴がこのグループのリーダー的存在になっっていたようだ。そのほうがこつちとしても楽なので嬉しいが…

「そうか。お主たちはこの後どうするか決めているのか？」

「はい、1週間後にこの城を出て魔王を倒しに行こうと考えています。」

あれ、そんなの決めたか？と周りを見ると雷太が頷いているので寝ている間にでも決まったのだろう。でも寝てたの知ってるんだから教えてくれよ……

「ふむ、それはお主たちだけで行くと考えていいのか？」

「そうです、我々8人だけでいくつもりです。」

「なるほど、分かった。しかし部下の中にはお主たちには任せておけないという奴もいてな、悪いが相手を頼んでもいいだろうか？」

「分かりました。ルールは何ですか？」

「3対3の試合で武器はこちらで用意したものを使ってもらう、もちろん魔法も有りだ。相手チームを全員気絶させるか降参させれば勝ちだが殺しは反則だ。」

「分かりました、3人ですね。」

シフォンが言っていた通りの展開になったな。

まあ、俺は出るつもりはないからゆっくりと観戦でもするとしてよう。

「というわけだから行くぞ海斗、雷太。」

「え？ 俺たちがやるの？」

「いいだろ、ちょうど3人なんだし。」

「そつだぜ、海斗、女の子たちにかっこいいところ見せようぜ。」

「それはどうでもいい。」

とりあえず雷太は放置の方向で…

「それでどうする海斗？ この中だとオレたち3人が一番連携が取りやすいと思うんだが。」

「分かった、ただし前衛は雄貴がやってくれ。」

「分かってる、最初からそのつもりだ。」

「こちらのメンバーは決まりました。」

雄貴が王様にそう報告すると向こうからも
3人の男がこちらに歩いてきた。

「うむ、こちらはこの3人に決まったぞ。」

「その方たちは？」

「この者たちはこの国の將軍で、この国では一番強い3人だ。この者たちとどれほど戦えるかでお主たちの力を見よう。」

「わかりました。」

「ではそこにある武器から1つ選んでくれ。」

近くにあるテーブルの上に武器がいくつか置いてあるので

その中から自分が好きな武器を選ばらしい。

武器は練習用のものなのですべて木製のようだ。

いろいろあつて迷ったが雄貴は木刀、雷太は魔法用の杖、

俺は弓を選び、相手の3人は木剣、魔法用の杖、木のナイフを選んだ。

ちなみに俺が弓を選んだのはこれから銃を使うことになるので

そのための練習をしようと考えたからだ。

選び終わる頃に敏明が俺たちに話があると言って俺たちを呼んだ。どうやら能力で相手の力を測ってくれたらしい。その結果相手の3人は全員レベルは40前後ということが分かった。やはり国内最強は伊達ではないらしいが、そこまで気にすることもないだろう。

補足

海斗はアテネと融合して通常状態でもステータスが異常に高くなっているのでリミッターをかけてレベル相当のステータスまで力を落とします。

(解除は自由にできる)

2 - 3 (後書き)

天川兄妹の兄の名前が統一されていなかったので修正しました。ちなみにあとの方の名前が正しいです。次回は登場人物のステータスなどです。

EX2 (前書き)

不定期更新中

キャラのステータスと簡単な服装説明を書きました。

EX 2

（地球人）

二階堂 海斗 L V ・ 3 5

リミッターなし（シンク口率1%）

H P（体力） 3 0 0 0

M P（魔力） 1 8 0 0

A T（攻撃力） 5 5 2

D E（防御力） 5 4 3

M A（魔法攻撃力） 7 1 5

M D（魔法防御力） 6 1 1

S P（素早さ） 6 5 7

リミッター有り

H P 7 8 0

M P 5 0 0

A T 1 8 7

D E 1 6 9

M A 1 7 5

M D 1 6 2

S P 2 0 3

服装：黒のジーンズに黒のジャケット（黒づくめW）

シンク口率を上げることによってステータスももっと上がる

ある一定まで上がると新しい能力も増える予定

宮川 雄貴 L V ・ 5 8

D E	A T	M P	H P	神 崎 美 羽	L V ・ 3 2
1 8 2	9 7	5 3 5	7 4 5		

服装：具体的には書きませんが映画版ハリーポッターで
 ハリーがしているような服装
 (ステータスから分かるように職業は魔法使いなので)

S P	M D	M A	D E	A T	M P	H P	橘 雷 太	L V ・ 4 9
2 3 4	2 7 2	3 0 2	2 5 3	1 6 7	6 8 0	1 0 0 0		

服装：暁学園高校の制服(白の学ラン)

S P	M D	M A	D E	A T	M P	H P
3 0 4	2 6 1	2 5 4	2 7 4	3 5 4	5 6 0	1 2 0 0

服装：白麗大学中等部の制服（紺のブレザー）

S	M	M	D	A	M	H	天川
P	D	A	E	T	P	P	太陽
				1	1	3	
9	6	6	7	1	8	5	L
0	8	2	8	0	5	0	v
							・
							1
							7

服装：シンプルな柄の和服

S	M	M	D	A	M	H	如月
P	D	A	E	T	P	P	凜
		1	3	3	5	1	
4	3	9	1	7	7	0	L
1	0	4	2	6	5	5	v
3	1				5	0	・
							6
							3

服装：神官みたいなローブ（白）

S	M	M
P	D	A
1	2	2
4	1	3
8	4	1

シフォン(火の国の王女)
 L V ・ 2 1
 H P 3 0 0
 M P 2 0 0

〔異世界人〕

三井 敏明 L V ・ 2 8
 H P 4 0 0
 M P 3 0 0
 A T 1 3 2
 D E 1 3 0
 M A 1 5 1
 M D 1 4 3
 S P 1 4 1
 服装：迷彩柄のシャツに青いジーンズ

天川 月 L V ・ 1 7
 H P 3 2 0
 M P 2 1 5
 A T 5 6
 D E 9 0
 M A 1 0 8
 M D 9 2
 S P 8 7
 服装：いわゆる白ゴス

M D	M A	D E	A T	M P	H P	アテネ（実体化状態）
1 0 0 0	1 0 0 0	1 0 0 0	1 0 0 0	？（海斗と共有）	？（魔力供給が切れるまでは無限）	L V ・ 3 5

（それ以外）

服装：メイド服	S P	M D	M A	D E	A T	M P	H P	サラ（シフォン付きのメイド）
	2 1 3	1 8 4	1 2 1	1 8 6	1 3 8	4 8 5	7 1 5	L V ・ 3 0

服装：赤を基調としたドレス	S P	M D	M A	D E	A T
	9 7	9 2	1 0 0	9 2	1 0 0

SP 1000

服装：白いロングワンピース

海斗の魔力の一部を分けてもらうことで実体化した状態のステータス。

ダメージをくらったり魔力を使う攻撃したりしてもらった魔力がなくなると実体化が戻る。

P.S.

ここに書いたステータス以外にも反射神経などの裏ステータスがあるという設定なのでこのステータスが全てではありません。まあゲームで同じキャラクターを使っても、うまい人と下手な人がいると同じことです。

基本ダメージ計算の式は

(AT + 技の威力) × 2 - DE × 2 と

(MA + 技の威力) × 2 - MD × 2 の予定です。

魔法属性の相性とかは本編で書きます。

EX2 (後書き)

実はシフォンとサラのステータスは関係なかったりします。ここにのっていない人のステータスが知りたい人は(いないと思うけど)いつてくれれば後書きに書きます。ゲームの世界という設定なのでどうしても説明が多くなるんですよね、本当はもっと書きたいことがあるんですけど…… 　　いつそのこと設定資料集でも作りたい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5151k/>

ゲーム世界へGO!!

2011年10月6日06時17分発行